

魚イサ今イマ以テ解ク作リ鉤ヲ也ナリ
堅ツ魚ノ此ノ由ニ也ナリ

願ノ本ノ秘抄ハ領ヲ書ス名義抄ハカヘリミルとモ訓

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

毛モとモむカへリミルとモ訓ス船ヲ止ム

さる由を以買るも。梶子小角の弭をそめたる以
るりをきこむ。常陸風土記行方小。有波瀬武之野。倭
武、天皇淳宿此野修理子弭因名也。以買倭こも
見え古事記に男手端之調。女手末之調。書紀に
て。其ハきい子とめ云て何る活き守。古ハは
弭を入多るにりり。連言此文みあふ云へ。於りや
あり。○當游魚之中即着弭而出云。下は注ふべし
まひ。○仍名曰頑魚。秘抄に名を号と作て。以づきふも
を記なり。但し谷川頑魚カタウヲみまひ。頑字
本ハ頑と作て。頑魚カタウヲみまひ。頑字
尋常小カタウヲと訓来きるハ。カタと以ふが本註
りて。一向は偏目意の言なり。伊呂波字類抄に。カタ

ホナリともりり。直ふ不敷の言なり。さてカタウ
ナとつふてカタウヲとり小言を連ねるなり。
クナを續紀二十卷の詔詞の中に。惡逆在奴久奈多
夫礼麻度比奈良麻呂と見え。久奈多夫礼
と。麻度比と別言なり。同紀の詔詞。其をク子く。こ
と。多夫礼とむりり。こも見え。りり
とク子心とひ小ク子と相通ハし云。字目同意の言
あるべし。字類抄は。嘸字。運歩集。小恨字。ク子心と
をりり。古今集。序。女郎花の一時をく。祢る。こも
も。女の情のク子く。こもをいへ。あふ。と。心
得。新撰字鏡。小。倭。加。太。年。靈異記。新。可。陀。

弥ふご訓不母直ならに備てて毛新にる可し
支く心へ不言行り。以は此魚を頑魚と名に守せぬ
て。船此舳小頑みく追来きぬ由なり。猿樂の鶴飼とい小謡の詞不
玉島川母河鹿松とも。小鮎さ驚あるせしら牙母か
たえく魚を母多老しを以るぬハ。毛を古歌の詞
不をきるな不べくこ申るを其本歌ハ以まじ考
ざれど。川此湾小鮎のるきみく在をし小く。ぬ
じとて。石の如多こといふ意とたこ在。るき屋よおもむ
あはも。○此今諺曰堅魚今諺やて後の世小と以
む。ごぞし。堅魚を如都乎をむ法し。和名抄母見
えあり。下小其本文を引く論不母し頑魚此約をきるなり。但し此
に堅魚を書てハ。字のすくに加太守乎とをむ法

まきをむ。小此魚の本名此頑魚と。名の呼ぎ万の轉じ
可申成り小書さほ小と。以る小不や松毛ハぬきど。
むのりこ加都乎を云ひく。阿万杯く堅魚を書なら
るるすく小書成なり。其意を得くとむべし。さて堅
魚の名此古く書に見えらぬと。古事記雄略段小。有
上堅魚作舎屋之家と見えきり。但し此屋上小置
く堅魚木小く。其形を堅魚の腊子象たる名かり。此
下小論其魚を云へぬと。万葉集詠水江浦島子長歌
云。水江之浦島児之堅魚釣云々。和名抄小。鯉大鮎也。
云。漢語抄云。加豆乎。式文用堅魚二字。塩梅類煎汁
の下小。本朝

加式云堅魚煎利洞物誌國讓小何きて見れむ。切つを

片ぼやまのあハび取ど何。但し漢字の鯉を當れ

文。漢國の鯉ハ體の類なりをぞ。此方小く鯉を書く

ハ。堅魚の二字を合さざるなり。けく延喜式亦ど小

見えざる。食料の品目此中。堅魚若干斤亦どある

を。うちするをさて此魚肉を割て煮何しハ湯煮

して干堅魚をく腊ハにするを以買り。俗小いてゆる

鯉節カワヅなり。肉ハ腊ハと以ふを。今義解ハ腊全干物也と

る。干して堅魚を鍛ふとりハ。もと同意の言れ

て堅魚をもちら東海西海の方小多る魚小。畿

内の海ハはをさく何に。兼好ハ徒然草に。鎌倉の

さ。以ふをさうなきもの。此ハ海魚と以ふ魚を彼

のなり。されも鎌倉此年より申は。此魚

おの種らが差うり。世万ハ。何うハ。又人此前

へ出不事ハを差うり。下ハ部ハもくを。ま

り。末て侍ハに。ありと申し。可や。此魚の

世の末。あれを。上ハま。鎌倉ハに。此魚の

そ侍れ。と云。その。武家の。此魚の

上ハま。と。東國ハある。武家の。此魚の

へ。都ハの。世ハ小。何ハす。ね。う。ぬ。魚。み。き。

る。の。肉。を。干。堅。魚。と。以。買。は。う。ち。ま。り。さ。

る。其。干。堅。魚。と。以。買。は。う。ち。ま。り。さ。

る。俗。小。加。都。字。と。以。ふ。ハ。堅。魚。の。義。也。堅。魚。

る。俗。小。加。都。字。と。以。ふ。ハ。堅。魚。の。義。也。堅。魚。

とたさへる強説なり。さてハその今蝦蟇の海まで
判りてまの差を何とりをいへる
捕る母志人と云魚成。国地にくハ其魚の全形を見
らるるのハをさくあらうで。割て腊うして渡さ
るをのこ食物とさめうら。其腊をきいに母志人と
云ふ也。輒者の刀此以く錯ハおのづから似らる
趣あるをさふべし。京ハくも諸国の中にくハ
まことさふり。但し式ハ堅魚廿二合。腊廿五十五
今おど見えゆる堅魚ハ上ハ云へることハ腊の堅
品を以る不れ体べし。すハ堅魚脯と何るそめき
先ハのすお節とをいふ。おれハ今俗ハな海に
以て又なほて節とをいふ。おれハ今俗ハな海に
介て見えざるをいへる。脯の海きハたな不潔し。又堅魚煎

ホ若干升と何るも。鮮魚の膏油取を云
今も海人の其ハ貯置ハ膏油ハ和をて物を煮
魚。是ハなハ。さて又式ハ堅魚なりぬ魚類ハ。鱈。鯨。鰻
鳥。賊。螺。干。物。な。ど。を。も。若。干。升。と。書。も。他。物。の。例。ハ。よ
る。に。乾。物。な。ら。ぬ。べ。き。成。然。書。も。用。込。り。の。造。り。さ。ら。ぬ。ハ。
今。さ。ら。ぬ。ハ。し。ら。ぬ。ハ。件。の。堅。魚。の。く。さ。ら。ぬ。ハ。の。造。り。さ。ら。ぬ。ハ。
今。さ。ら。ぬ。ハ。し。ら。ぬ。ハ。件。の。堅。魚。の。く。さ。ら。ぬ。ハ。の。造。り。さ。ら。ぬ。ハ。
舎屋の堅魚ハ。今も神社の製ハ遺る堅魚木ハ。
其ハ今の世ハいハ由る鰻節に似せぬ故の名なり。
と。その。記。の。傳。ふ。く。ハ。説。ハ。ま。ら。ぬ。も。然。ぬ。も。さ。ら。ぬ。
ハ。其。を。中。中。離。り。て。望。ま。さ。バ。然。も。象。里。由。名。流。く
ハ。状。々。中。中。の。注。今。以。角。作。釣。柄。釣。堅。魚。此。之
由。也。此。注。文。以。ハ。意。得。く。前。山。安。房。の。國。人。ハ。尋

問ふに。其國和堂り此海人の鯉釣るさ海を見聞く
に。牛角此先のうゝ。魚此口も合ふ。俗く削作して
鉗代とし。其旁に鐵鉤を結着て。其牛角の本此方
小孔を穿る。釣繩を貫し。骨免をとり。本方七八寸圍
り。大竹を八九尺むうり。玉切て釣棹として。釣る
なり。ひふりと談きり。以由。角作鉤柄と云るに合
ひて。記こゆ。此注文秘抄。釣堅魚の三字を脱し。作
橋橋形。書る本。何れも悉記なり。橋之字。又以
無き本も有る。此もソの誤りなり。又。以て
く。近世或は其鉗代の角を鞆皮にて包み。又鳥の
櫛襪の黒きを以して。角を纏着。なごまきむ。をく釣

食ふ。毛のなりと云へ。里。日本海人の心こり。やうく
あし。らへて。毛のた。る。あ。る。べし。かく。高。船。に乗。り。て
海原をうら。ひ。鯉の集まる處。に。到。り。て。舟。以。乗。り。列
免。る。此。鉤。の。角。を。投。入。る。ま。波。群。寄。り。を。競。ひ。食。ふ
或。大。聲。を。揚。て。心。を。免。く。心。を。免。ひ。て。時。の。中。に。數
隻。釣。上。ふ。なり。何。や。り。不。多。く。集。ま。る。時。も。骨。免。船。に
あ。る。船。の。群。を。競。を。寄。り。て。船。中。に。も。跳。入。り。す。往
來。の。他。船。を。も。慕。ひ。追。来。寄。り。り。な。る。事。も。ま。き
し。何。と。聞。え。と。み。を。語。き。後。上。総。伊。豆。相。摸。の。國
人の語き。る。も。そ。り。ど。り。な。ら。ば。大。む。祢。同。じ。此項元
禄五年

山野必大云人の著さめ。本朝通鑑嘗以不書を
見。鉤以鐵釣而釣者以鱸為餌。云々。若來釣時過群
無鉤而釣則驚跳入船不可當魚陣之中。恐魚多。既
沈于船。故遠望群鯉之至。則急棹船去矣。はやくむ
む。一人此記。注き添へ。此時の古事。小とよく
合ひて。此こゆめ。小何と考ふるに。上小以角弭
之。弓當游魚之中。即着弭而出。忽獲數隻。と以爲其
弓弭。牛角。少を製て。堂中。其を遊へ。堅魚
の中。擬ひ。堂中。其を遊へ。其角。小喫着。て水を
出。堂中。を捕。き。由。小。此。元。堂。り。肥。後。風。上。記。小。此。
右。遊。魚。多。之。棹。人。吉。備。朝。勝。以。釣。釣。之。多。有。所。獲。即。獻

天皇。勅。曰。所。獻。之。魚。此。為。何。魚。朝。勝。見。奏。申。未。解。其。名。
正。似。鱸。魚。耳。歷。御。覽。曰。俗。見。多。物。即。云。爾。倍。依。尔。今。所。
獻。魚。甚。多。有。可。謂。尔。倍。魚。今。謂。尔。倍。魚。其。緣。也。と。見。え

船遇潮涸天渚上尔居奴掘出止為尔得八尺白蛤一貝

船遇潮涸天云。頑魚を釣。り。磯。近。く。漕。還。り。来。由。
る。時。潮。涸。る。と。遭。て。船。の。渚。に。般。せ。る。り。和

名抄舟車類に。説文云。般。般。着。砂。不。行。也。為。流。色。葉。字。

般。般。不。叶。万。葉。集。相。聞。譬。水。沙。兒。居。渚。座。船。之。夕。

塩。子。將。待。從。者。吾。社。益。と。免。る。譬。喻。詞。の。趣。なり。歌。

の。渚。座。般。を。田。説。ス。ニ。カ。ル。フ。子。と。免。る。收。○。掘。出
止。為。尔。云。々。船。の。渚。上。に。般。せ。る。り。潮。の。来。る。候。待。せ

了。砂を掘り潮水を引て。船を浮べ出させと爲るな
りの八尺白蛤一貝。ヤカカシロウムキヒトツとよ
む。八尺ハ蛤の大なるほどをいへるなり。万葉
集杖不足八尺嘆と免るも。一丈は足らぬ八尺
といむる素と免るも。其本語を知取し。但し物の
長字はうゑに。丈尺寸分を云ぬ。漢國の度制は片
きて設き名なる。尺は中も。尺は字
音なるなり。又尺は當て設き名と言はる。古
字音は似せしむるも何る。尺度の名は事。古
二寸。四尺一寸。又正段は九尺二寸など見えざる。以
其処の傳は論はききり。讀見たる本考ふ。以

づきも。この八尺漢風の度制ならむ。當昔の
言ふも何ら。傳説の趣を。後の言ふも。語傳
へき。記を。意得。常陸風土記郡下
。倭武天皇為巡東岳宿此野有人奏曰云々。又海
有鯨魚大如八尺と見え。おのづから同例に
記を。蛤も。本草和名。海蛤和名
字牟岐乃加比。見由。波万具里。古名なり。
此時の事を。姓氏録高橋朝臣の譜。景行天皇巡狩
東國供献大蛤と見え。書紀と。姓氏録膳大伴部の
譜。白蛤と見え。全文。下は
奉記。下は

磐鹿六獺命。捧件二種之物獻於大后。即大后譽給比悅。
給互詔久。甚味清造欲供御食。今時磐鹿六獺命申久。六
獺令新理。天將供奉。止白。天遣喚無邪志。國造上祖大多
毛比知々。夫國造上祖天上腹。天下腹人等。為膾及煮燒。
雜造盛天。見河曲山。椀葉天高次八枚刺作利。見真木葉
天枚次八枚。刺作天。取日影。豆為縵。以蒲葉。天美頭良
手卷。採麻佐氣。葛天多須岐。仁加氣為帶。足纏手結。天供
御雜物。手結。饅天。乘輿從御。獺還御入坐時。尔為供奉。
秘抄云。悦より造内ての九字脱きり。又款を鮎繪給
なり。盛天万三十三。○捧件二種物ハ。の頑魚と白蛤
七字を畧たり。

との二種なり。捧て古事記神代段。其取后大御酒
杯。立依指舉而云々。雄略段。三重採指舉大御盃名
義抄に捧。ヤ。グ。○甚味清造云々。天皇の御獺たり
還幸さる時。不供奉らむと詔へるなり。造をツ。ク。リ
と。む。べ。一。其由て次。○今時磐鹿六獺命申久。と
以ひて又徒。六獺と。一。毛。以。爲。る。也。が。て。其。奏。せ
る言なり。以ひ。一。ら。以。爲。る。と。き。古。文。なり。○令料理
天云々。六獺命。此の神御饌を掌りて人々。料理せ
り。献らむと奏を留なり。其人々。料理の字。大嘗
祭式。凡料理御膳。古點。ツ。ク。ル。等。を。免。り。さ。く。あ。る。

毛其言もくを世に上。上文の清造と詔旨もくは
了。下進物も見造食物字料理字なり。今
言の遺きも古洞物語卷後魚鳥の俎と色き魚つ
くぬ。又巻上中なひとて魚鳥の俎と色き魚つ
物語ふ。心を此稚子字の音からけりて久たむ
など本所り。今此つと十二月の歌ふ。曾
も又垣福北雪字に鶴の上毛とおもふ。歌
や。又その巻末に載る源順朝臣の可歌。歌
も片くはるるの子や。難波江の葦間我和歌
く。ありの約里と家より。信事料理人此皇と
こ。元々の事。さるるの心。古事記神武天皇の御歌
聖。鯨の事。肉を薄く。小恵泥と万歩み。傳
く。

辨へ法を移り。或人京上。阿公家。考おき。つ
に。阿也。今日。存。多。酒。者
調。阿也。今日。存。多。酒。者
ひ。其。考。阿。由。人。此。事。酒。者
に。既。此。考。阿。由。人。此。事。酒。者
合。得。た。り。四。條。家。後。京。人。た。呼。不。例。り
と。を。さ。る。に。公。家。が。自。然。呼。不。例。り
なり。を。さ。る。に。公。家。が。自。然。呼。不。例。り
よ。く。き。こ。え。た。れ。○遺喚無邪志國造上祖大多毛比
邪の下志字脱せり。心す。引く國造本紀を
證とて決を補ひ。さる。年邪志と武藏なり。國
造本紀。无邪志國造志賀高穴穗朝。成務世。出雲臣
祖名。二井之字迦諸忍之神狹命十世孫。兄多毛比命